

地人の道を歩もうとした宮沢賢治

——農業技師という側面から——

中島 紀一

はじめに

宮沢賢治の愛読者、愛好者は大勢おられる。賢治を論じた著書も多く、私の書架にも三〇冊ほどの賢治論が並んでいる。いずれの著書も賢治を深く敬愛し、賢治の作品と歩みを詳しく読み込み、心を込めて書かれたものばかりである。その中には私の愛読書もある。私がつとも身近に感じられた賢治論は山尾三省さんの『野の道——宮沢賢治随想』（野草社、一九八三年）である。

宮沢賢治論を巡るこんな状況のなかで、賢治について改めて論じる隙間はもうほとんどないようにも思えた。私の場合は、若い頃から賢治に惹かれ、その作品もぼつぼつと読んできたが、専門家とはほど遠く、単なる周辺の一読者に過ぎない。だが、それでも宮沢賢治と有機農業について小さな覚え書きくらいは書いてみたいと思うようになっていた。

そんな気持ちになって書架に並ぶ賢治論のページをめ

くつてみると、農民とともに野の道を歩こうとした農業技師として賢治について論じたものがあまり見あたらないことに気付いた。もちろん私の見落としもあるだろうが、この関係の論考が少ないことは間違いないように思われる。賢治には数は多くはないが、すばらしい農事詩がいくつかある。「雨ニモマケズ」や『農民芸術概論綱要』は別格として、比較的よく知られ、論じられることのあったのは「野の師父」や「稲作挿話」だろう。しかし、そのほかの農事詩については読み、知られることは少ないように思われる。

賢治の人生は短かったが、そこには実にさまざまな顔と道筋があつた。詩作や童話創作に取り組んだ文芸家としての賢治、日蓮宗の熱心な信者だった宗教家としての賢治、そして農業や農村に関わって新しい現実世界を作ろうとした社会的実践家としての賢治、などがその主なものだろう。私は、これらの様々な賢治像の中で、実践家としての

賢治に惹かれ、なかでも農業技師としての賢治について、自分自身と引き比べながらいろいろと考えてきた。

以前に『農民文学』への寄稿を誘われて、嬉しく感謝し、この機会に賢治について書いてみたいと思いはしたが、実際には筆が進まないままで経過してしまった。単なる一読者が文学雑誌に賢治について一文を書くと言うことは、やはり躊躇はある。読み込み不足や資料探索の不備もあるだろう。また、独りよがりの間違いもあるだろうとも恐れた。しかし、それは後で厳しくご指摘頂くとして、賢治が野の道を歩もうとした農業技師だったとすれば、その志に続くとする後輩の一人が追想の文章を書いてもおかしくはないと自分を励まし、この文章をまとめることにした。とても賢治論と言えるほどのものではないが、現在の私の覚え書きとしてお読みいただきたい。

農業技師としての賢治の歩み

まず、すでに詳細に整理されている先学者らによる年譜から、野の道を歩もうとする農業技師としての賢治の歩みを摘記しておこう。

明治二十九年（一八九六） 岩手県稗貫郡花巻町に生まれる。

実家は花巻町で質、古着商を営む新興の富裕な商家だった。この出自がその後、賢治を地人の道へと進ませることになった。

明治三十六年（一九〇三） 町立花巻川口尋常小学校入学。四年生頃から鉱物、植物、昆虫採取と標本作りに熱中するようになる。

明治四十二年（一九〇九） 県立盛岡中学校入学、寄宿舎生活になる。

近辺の山野に出かけ、鉱物、植物採取に熱中。

大正四年（一九一五） 盛岡高等農林学校入学。

土壌学の教授関豊太郎教授に師事。地質学的土壌学を学ぶ。

大正七年（一九一八） 母校に研究生として残り、稗貫郡土性調査に従事し、地形地質学的土壌学の基本を実地に体得し、また、稗貫盆地の農地土壌について詳細な知識を得た。

大正九年（一九二〇） 母校研究生を修了。

父からは家業を継ぐことが求められたが、貧しい人々から利益を得るような商売のあり方を嫌悪し、父の求めを拒絶した。また、恩師からは助教授として母校に残ることを勧められ、父も学究の道に進むことに賛成したが、賢治は学究の道も選ばなかった。

大正十年（一九二一） 地元の郡立稗貫農学校（後の県立花巻農学校）の教諭となる。

農学校教諭として、生徒とともに多方面に大活躍した。その過程で農民芸術を構想し、その推進を提唱するようになる。

大正十五年（一九二六） 花巻農学校教諭を依願退職。下根子の別宅に移り自炊生活を始め、地人への道に踏み出した。同志を募り荒地地開墾に取り組む。各地に肥料相談所の開設を企画し、また、六月には「農民芸術概論綱要」を執筆。十一月には「羅須地人協会定期集会」の案内を出した。この案内文に羅須地人協会の構想が示されていた。そこでの主な農事活動は肥料設計相談だった。

昭和二年（一九二七） 労働党稗貫支部の活動に便宜を図ったとして警察の調査を受けた。

昭和三年（一九二八） 稻熱病が大発生するなかで、肥料相談、農事指導で地域を奔走し、八月に疲労で倒れ、以降、逝去に至るまで健康は快復しなかった。

昭和四年（一九二九） 病床に東北砕石工場主の鈴木東蔵氏の訪問を受け、事業についての相談を受ける。石灰岩利用という岩石関係の仕事であり、大きく心が動いたようだ。

昭和六年（一九三一） 病状が少し快復したので東北砕石

工場の技師となり、石灰販売の仕事に懸命に携わる。しかし、この仕事でも過労となり、病状はぶり返し、再び発熱臥床を繰り返すことになり、つらい療養生活を続けなければならなかった。そうした病床でも農民からの肥料設計の相談にも対応していた。

十一月に「雨ニモマケズ」を手帖に書いた。

昭和七年（一九三二） 三月に病床で「グスコブドリの伝記」を執筆し公表。

昭和八年（一九三三） わずかに歩行できるようになり、肥料設計の相談対応を再開した。しかし、病状は良くならなかった。逝去の前日にもなお農民の農事相談に応じていた。

九月二十一日、「南無妙法蓮華経」と唱題した後、喀血して逝去。享年三十七歳

賢治のこうした歩みを、社会的実践家、なかでも野の道を歩もうとした農業技師という側面から時期区分して、その要点を整理すれば次のようになる。

幼少期…新興の質屋・古着屋の長男として生まれたこと。

賢治は、成人して、農民に近づき、農民と共に野の道を歩き帰農へと歩んでいくことになるのだが、年譜抄でも述べたように、その起点には

賢治の出自と家業への嫌悪感があつた。

また、小学生の頃に鉱物採集、植物採集に熱中したことが、賢治の石と天体についての独自の世界を開く基になった。

盛岡高等農林時代…恩師関豊太郎と出会い、地質学的土壌学を学び、石ころ少年の夢が大きく広がった。研究生の時に稗貫郡土性調査に携わり、稗貫の山野を調査でくまなく歩き、その地形と表層地質、そして土壌について十分納得できる像を描けたことが、その後の農業技師・宮沢賢治のすばらしい基礎となった。

卒業後の進路に関して、家業を継ぐことを拒絶し、人造宝石の加工商を夢想したが、具体化できず、結局、地元の農学校教師となった。この選択は、花巻の裕福な商家の長男としての賢治にとって、貧しい農民たちと結び合う下向への大きな転換点であつた。家業は弟の清六が継ぐことになったが、清六も質・古着商への嫌悪感が強く、大正十五年に質・古着商を廃業し、宮沢商會を開業し、商店として建築材料や電動具などの販売に携わることになる。

花巻農学校時代…教師になる気などまったくないと

ていた賢治だが、生徒らと共に農学校の教師として大活躍する。これまで培ってきた賢治の才能が全面展開していった。そのなかで「農民芸術」「地人」という構想が形作られ、固まっていた。農学校の生徒の多くは農家の子供たちであり、その多くは卒業後は百姓として生きていく者たちだった。賢治はここで初めて現実の百姓たちと交わり、その社会的現実と向き合うことになったのだろう。

羅須地人協会時代…農学校教師としていわば絶好調の時に、賢治は「本統の農民になる」と思いを固め、次への跳躍として農学校を辞して、地人、帰農の道、すなわち社会的実践家としての道へと進んだ。その時の賢治が描いたモチーフは「農民芸術概論綱要」に示されており、それを進める組織として「羅須地人協会」を設立した。地人という造語に賢治が何を込めようとしたのかは、大いに議論のあるところだが、そこでは「農民芸術という世界の実現」「農耕と生活文化の共同体創設」「農事相談、農事改良の推進」等が意図されていたことは明確のようである。しかし、「共同体創設」については、治安維持

法が大正十四年（一九二五年）に公布されるという時代状況のなかで、当局からの嫌疑や圧力もあつたのだろう、明示的な活動目標としては間もなく取り下げられてしまう。

同志たちとの荒れ地開墾を含む初めての農耕生活は、賢治に大きな喜びを開いたようだが、同時に賢治の体力ではかなりつらいものだったよう、疲労が蓄積し、健康が損なわれていったものと推察される。

農事相談は農民からの求めに応じた肥料設計がおおよそ二〇〇件とされており、驚異的な活躍ぶりである。しかし、この活躍と熱中も賢治の体には大きな疲れを蓄積してしまつたものと推察される。

昭和三年（一九二八年）八月、ついに病に倒れ、「羅須地人協会」時代の活動は二年四ヶ月で終わった。

病臥のなかで、昭和八年（一九三三年）九月の逝去の日まで、健康は回復せず、主に病臥の日々が過ぎた。「羅須地人協会」の夢は、疲労そして病によって無惨に破れてしまつたのだが、しかし、賢治はこの病臥の時期も懸命に生きた。農民か

らの求めがあれば農事相談、肥料設計にも応じていた。

病をおして東北採石工場の技師として働き、その疲れも死を早めたのではないかと思われる。砕石工場技師に賢治が何を求めようとしていたのか、それが病臥のなかの賢治にとってどのような方向選択を意味していたのかは検討されるべき事柄と思われる。

「雨ニモマケズ」と「グスコープドリの伝記」が病臥の賢治にとって最後の作品となつた。それぞれに示された賢治の精神にはどんな特質が示されているのか。それは同じであつたのか、異なるところもあつたのか、等の論点についても「羅須地人協会」以降の賢治の歩みとして検討されるべきだと思われる。

最初にも述べたが、賢治にはもちろん農業技師という側面だけでなく、文芸家、宗教家という大きな側面もある。これら側面の主な特徴を右に述べた時期区分に沿って整理すれば次のようになる。

童話創作や詩作などの文芸活動については、次のような歩みがあつた。

盛岡中学校時代から短歌の創作が始まり、盛岡高等農林時代には、同人誌「アザリア」を創刊している。高等農林の研究生時代に童話創作が始められた。童話創作は花巻農学校時代に最盛期を迎える。また、その頃から詩作にも取り組みはじめ、一九二四年には『春と修羅』（第一集）、童話集『注文の多い料理店』を刊行している。羅須地人協会時代に『春と修羅』（第二集）、（第三集）の旺盛な詩作が続けられた。すでに書いたように、病臥のなかで「雨ニモマケズ」を書き記し、「グスコープドリの伝記」を執筆した。また、その頃に「銀河鉄道の夜」、「ポラーノの広場」について大幅な加筆改訂をしている。

宗教家としての賢治の歩みはおおよそ次のようであったとされている。

熱心な浄土真宗の家に生まれ、仏教的環境で育った。一九一二年、十六歳の時に盛岡在住の浄土真宗の僧侶島地大等の法話を聞き、歎異抄に心酔。一九一四年島地の編著『和漢対照妙法蓮華経』を読み強く感動した。一九二〇年、日蓮の法華経に傾倒し日蓮宗の信者団体である「国柱会」に入会。一九二一年、法華経布教のための創作を「法華文学」と称して創作活動に励んだ。一九三三年、病臥の中で「南無妙法蓮華経」と唱題し、咯血して逝去。法華経千部を印刷し知人に頒布することを遺言した。

賢治の農事詩

さて、賢治の歩みを以上のように整理した上で、賢治の農事詩について考えてみたい。

賢治の詩作の多くは『春と修羅』第一集から第四集にまとめられている。生前に刊行されたのは第一集のみだが、第二集、第三集は刊行のために賢治が編集したもので、第四集は没後に関係者が第一集から第三集に漏れていた詩作をまとめたものである。『春と修羅』の副題を賢治は「心象スケッチ」としており、その趣旨に則して、作品はおおよそ執筆順に掲載され、作品番号、執筆日も記載されている。しかし、第四集にはそれがなく、執筆時期が不明のものもある。

それらの詩作のなかで農事詩と呼べる作品は『春と修羅』第三集からで、第一集、第二集には見あたらない。第三集の収録作品は一九二六年以降のもので、したがって賢治の農事詩は、花巻農学校を退職し、「羅須地人協会」を展開させた時期にはほぼ限られているということである。

比較的良好に知られている農事詩の執筆年次を拾えば次のようである。「野の師父」（一九二七年三月二十八日）、「稲作挿話」（一九二七年七月十日）、「和風は河谷いつばいに吹く」（一九二七年七月十四日）、「臺地」（一九二八年四月十二日）、「穂孕期」（一九二八年七月二十四日）。関連して「農

民芸術概論綱要』の執筆は一九二六年六月、「雨ニモマケズ」は一九三一年十一月とされている。

右に挙げた「野の師父」から「穂孕期」までの詩作は、「稲作詩」とでも呼ぶべきもので、感動的でとても美しい。賢治が農業技師として稲作の肥料相談に駆け回るなかで書かれたものである。『春と修羅』第三集の後半に収録された詩作である。

それに先だつて、『春と修羅』（第三集）の前半には、「稲作詩」とは趣を異にした「農業労働詩」とでも呼ぶべき作品群が収録されている。「農業労働詩」の多くは一九二六年、すなわち「羅須地人協会」スタートの年の作である。

こうした予備的認識の整理を踏まえて、賢治の「稲作詩」と「農業労働詩」について、その相違も含めて考えてみたい。時期を追うことが良いと思われるので「農業労働詩」から具体的に考えてみよう。

「農業労働詩」の断片から

賢治の「農業労働詩」は一般にはあまり知られていないと思われるので、『春と修羅』第三集の前半に収録されている詩のなかから特徴的だと思われる詩句をいくつか抜き出してみたい。

驟雨はそそぎ

土のけむりはいつさんにあがる
ああもうもうと立つ湯気のなかに
わたくしはひとり仕事を怠る

・ ・ ・ 枯れた羊歯の葉

野ばらの根

壊れて散ったその塔を

いまいそがしくめぐる蟻

杉は驟雨のながれを懸け

またほの白いしぶきをあげる

「園場」作品二七六番 二十六年七月十五日

たのしくしづかな朝食な筈を

こんなになたたくしの落ち着かないのは

昨日馬車から坂のところへ投げ出した

厩肥のことが胸いっぱいにあるためだ

「仕事」作品七三四番 二十六年八月二十七日

ここの畑で聞いてゐれば

楽しく明るさうなその仕事だけれど

晩にはそこから忠一が

つかれ憤って帰ってくる

「はるかな仕事」作品七三八番 二十六年九月十日

野ばらの藪を

やうやくとつてしまったときは

日がかうかうと照つてゐて

そらはがらんと暗かつた

おれも太市も忠作も

そのまま笹に陥ち込んで

ぐうぐうぐうぐうねむりたかつた

川が一秒九噸の針をながしてゐて

鷺がたくさん東に飛んだ

「開墾」作品第一〇一七番 二十七年三月二十七日

白いオートの種子を播き

間に汗もこぼれれば

畑の砂は暗くて熱く

藪は陰気にくもつてゐる

下流はしづかな鉛のみずと

尾を曳く雲にもつれるけむり

つかれは巨きな孔雀に酸えて

松の林や地平線

ただ青々と横る

「燕麦播き」作品一〇三六番 二十七年四月十一日

ひとの馬のあばれるのを

なにもそんなに見なくてもいい

おまえの鍬がひかつたので

馬がこんなにおどろいたのだと

こぼれた厩肥にかがみながら

封介はしづかにうらんで云ふ

封介は一昨日から

くらい厩で熱くむつとする

何百把かの厩肥をしばつて

すっかりむしゃくしゃしてゐるのだ

「悍馬」作品一〇四六番 二十七年四月二十五日

これらの詩句に記された農業労働についての賢治の心象

の要点は次のようになるが、それはいかにも暗い。

・ 農業労働は過酷で辛い。

・ 農業労働は思うようには進まない。

・ それ故に農業労働は人々の心を離反させ、トゲのある

人間関係を作ってしまう。

これらの詩句から受ける印象は賢治の他の詩篇とはかなり違っている。自然の中での野良仕事のすばらしさ、自然

のいのちと交差する労働のすばらしさを謳歌するという
ニュアンスはそこにはほとんど頭れていない。

賢治は農学校教師を辞し、下根子の別宅で自炊生活を始めてから、自ら本格的に農耕に従事することになった。それが彼にとつての初めての本格的農作業であつた。「農業労働詩」はその時の体験を率直に認めたものであろう。賢治の農耕への取り組みは一直線に真摯であつたが、農の現実には彼の挑戦を安らかに受け止めてくれなかつたということなのではないか。

よく知られているように『農民芸術概論綱要』には農の労働について次の言葉が記されている。『綱要』の起稿は、右に抜き書きした農業労働詩が書かれたほんの少し前の一九二六年六月頃と推定されている。

「おれたちはみな農民である。ずるぶん忙しく仕事も辛い

もつと明るく活き活きと生活する道を見付けたい
われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あつた」

「曾て我らの師父たちは乏しいながら可成楽しく生きてゐた

そこには芸術もあり宗教もあつた

いまわれらにはただ労働が、生存があるばかりである」

「いまやわれらは新たに正しき道を行き われらの美をば作らねばならぬ

芸術をもてあの灰色の労働を燃せ

ここにはわれら不断の潔く楽しい創造がある」

ここに示された賢治の農業労働観について、私たちは、彼が農の労働について十分に体験し、自然とともに生きようとする農の労働の本質についてもしっかりと会得した上で、語られたものと考えがちである。しかし、それは少し違っているのかもしれない。もし彼が農の労働について十分な体験と認識を持っていたとすれば、農の労働は辛く暗いばかりではなく、自然と結び合う歓び、いのち育む創造的歓び等がそこにはあり、人々の暮らしの長い歴史の基盤には農の労働があることをもつとポジティブに論じていたのではないだろうか。『綱要』では、冷たく暗い農の労働の否定の上に、農民芸術の創造が構想されている。しかし、もし、彼の農業労働観がもつと成熟していたとすれば、『綱要』の展開はかなり違っていたのではなからうか。一九二〇年代の寄生地主制のもとであえいでいた東北農村の過酷な現実を踏まえたとしても、これらの詩句を読む限

りでは、賢治は農の労働の入り口にいて、それとうまく馴染めず、その世界にまだ入り込めずにと理解した方が良いのではないかとも思えてくるのである。土に生きる一人の百姓としての歩みがまだうまく始められずにいる。そんな賢治の姿がここに示されているとも言えるのではないか。さらに言えば「農民」とせずに「地人」とした彼の造語には皮肉にもそんな彼の状態が反映されていたとは考えられないだろうか。

この時期の賢治の農耕生活の様子について教え子の菊池信一氏の次のような回想も残されている（堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』図書新聞社、一九六六年、中公文庫版三〇二～三〇四ページ）。

「目をもどすと、窓越しに机にもたれて眠っている賢治の姿がうつった。／陽にやけた顔、あみシャツをとおしてあらわに見える黒い肩、蚊にさされた無数の黒いあと、破れたかかとの穴を反対にしてはいている靴下の穴からヨードチンキをぬつたいたましい切り傷」

「めしは三日分くらい一どにたき、梅干しを入れて井戸につり下げておく。賢治は教え子のためにそれをひきあげ、汁をそそいでくださき、原形そのままのたくあんを左手でかじりながら、ふたりはおいしい夕食をした」

また、料理について賢治の次のような言葉も記録されて

いる。

「料理なんて結局水に味をつけただけです。ごはんは一晩井戸の水気を十分含んでるしね」

そこには過酷な労働生活の中で、それに耐え、それと適応しながらしつかりと生きてきた農民らしい暮らしの姿を感じることはできない。率直に言って、ここからは農民の労働観や生活感の成熟を読み取ることはできない。

「稲作詩」への展開

暗さだけが目立っていた「農業労働詩」と入れ替わるように、羅須地人協会二年目の一九二七年になると、明るく自信に満ちた「稲作詩」が次々と書かれるようになる。協会の重要な仕事として農事相談、肥料設計、稲作指導があり、賢治はそれらの仕事にのめり込んでいく。

前にも書いたように賢治が農民に手渡した肥料設計書は二〇〇〇件を超えると伝えられている。後で紹介するように、その肥料設計は、田んぼと農家の条件に則して極めて具体的に詳細なもので、それを短期間に二〇〇〇件も書いたとはまったく驚くべきことである。寝食を投げ打っての頑張りが続けられたに違いない。それだけ農家からの求めがあり、賢治には求めに対応する力があつたということだろう。これらの農事相談等は協会一年目から開始され、恐

らくその年にはその効用が現場で確かめられていたのだらう。

「稲作詩」はそれらの実績と自信を踏まえて書かれたと言えるだろう。その内容は農学的にもたいへん優れたものとなっている。

賢治の「稲作詩」の頂点には、歎喜の歌と言うべき「和風は河谷いつばいに吹く」（二十七年七月十四日）を置くことが出来る。そこには田んぼの自然とそこに生きる稲と農家の努力とそして賢治の懸命な技術的アドバイスが四つが呼応し融合しながら歎喜の世界が作られていったと記されている。そしてそうした稲作実現の基礎には、賢治の周到な肥料設計（技術提案）があった。その有り様は「それでは計算いたしましたよう」（執筆時不詳）に詳しく記されている。

私はこの詩とその農学的意味について、学生時代に恩師菱沼達也先生から強く教えられた。そこには田んぼの土地条件が、地形・土壌学の視点から詳細かつ具体的に認識され、農家自身によって把握された個々の田んぼの営農的特質が確かめられ、さらに個々の農家の稲作への考え方が把握され、その上で、賢治による施肥提案が総合的技術提案として判りやすく農家に提示されている。

「それでは計算いたしましたよう」は、私が知る限り、世の

農業技術詩としては最高の作品であり、田んぼと稲の技術論としても最良の作品だと断じることができる。ここまで考え抜いた肥料設計が出来たのは、賢治が稗貫郡土性調査等でこの地域をくまなく歩き調べた成果であり、また、農家との真摯な対話を通じて農家の生活事情と稲作についての考え方をしっかりと理解できていたからだと考えられる。そして何よりもこの地で生きる稲のいのちへの賢治の思いの深さによるものと言えるだろう。

私はこの二つの詩を対のものとして捉えている。

「野の師父」と「稲作挿話」も対をなす「農事詩」の傑作である。テーマは農の技術の継承と次を担う担い手についてである。「野の師父」には土に生きてきた老農たちへの畏怖と尊敬、その天地と一体化した到達点のすばらしさ、そしてそれに続くこうとする自分自身への決意が記されている。「稲作挿話」には自分の後に続く教え子たちが、学び働くなかで正しく成長し、しかも軽薄な世情への批判の力を身につけていくことへの暖かな、そして強い思いが記されている。この二つの詩は戦後日本のたくさんの方々に読まれ、感動と励ましを与え続けてきた。

私も賢治の後に続くこうとしてきた一人の農学徒として、ここに挙げた四編の「農事詩」はいつも仰ぎ見る目標であった。「本統の百姓になります」という決意で、農学校教師

を辞職し、羅須地人協会を興し、土に生きる一人の百姓として、また農家と共に生きる農業技師として、いのちを懸けた賢治の二年四ヶ月の疾走の意味について、私も、後輩たちに繰り返し語ってきたし、これからも語り継いでいきたいと思っている。

未完の賢治の道——宮澤賢治と有機農業

しかし、賢治が生きた時代から間もなく一世紀が経過し、いま賢治のいのちを懸けた仕事を振り返ってみると、その仕事は輝きに満ちてはいるが、しかし未完で、先も見えていなかったと言うしかない。それは賢治の仕事とその達成を貶めるのではなく、それを正しく位置づけ、評価するためにも不可欠な認識だと考えている。

農業技師としての賢治が生きたのは、一九二〇年代の東北、夏にはヤマセ吹く岩手の稲作だった。この地域の人々の暮らしを支えてきた伝統的な農業は、水田農業ではなく畑での雑穀栽培であった。

亜熱帯が原産の水稲が日本に渡来したのは弥生の頃とされているが、それが東北にまで広がり始めるのは三〇〇年ほど前からだった。東北地方でも日本海側の地域では一〇〇年ほど前には、水稲は地域に馴染み、それぞれの地域らしい技術も作り出され、稲と田んぼは安定した農の基

盤となっていた。

しかし、賢治の生きた岩手に稲作が定着するのは賢治が生きた時代（大正期頃）からだった。まだ、水稲は岩手の風土に馴染み切れておらず、岩手の田んぼも水稲が育つ場としてはこなれ切れてはいなかった。百姓たちもまだ稲作を自分のものにできてはいなかった。しかもその頃、岩手の稲作にも硫安、石灰窒素、過リン酸石灰などの化学肥料が急速に広まりつつあり、岩手の近代稲作は初期の大混乱のただ中にあった。また、そうした岩手県においても、稲作を基盤とした地主制の社会体制だけは強固に作られようとしていた。

歓喜の歌としての「和風は河谷いっばいに吹く」にしても、それを仔細に読んでみれば、成功した稲作も綱渡りのような不安定さの中にあつたことが良くわかる。雨が降れば稲は倒伏し、化学肥料に起因する稲熱病も多発していた。そうしたなかで賢治は、肥料設計において、化学肥料のやり過ぎを戒め、堆肥や有機質肥料の施用を重視し、総合技術として考え抜いた施肥設計（稲作指針）を農家に提示した。また、苗半作の教えを守り、健苗育成の大切さを強調した。化学肥料への対応力、冷害への対応力のある品種、陸羽一三二号の普及にも努めている。合理的な栽培管理のために正条植えの奨励もしている。

だが、当時、岩手の近代稲作が抱えていた問題点は、そうした個別の技術的努力で解決できるようなものではなかった。

冷害についてみれば、賢治が稲作指導に奔走した頃までは、強い冷害はなかったが（大正期から昭和初期までは岩手でも大きな冷害に見舞われることはなかった）、賢治が病をおして東北砕石工場の技師として働いた一九三一年には大冷害、大凶作となり（ほぼ五分作）、東北農村には飢饉が広がり、さらに賢治没後の三十四年、三十五年にも連続した大冷害に見舞われ、東北農村は昭和農業恐慌の泥沼へと落ち込んでしまった。

「サムサノナツハオロオロアルキ」という詩句は、再び病の床につき、冷害の惨状になすすもなくすごさざるを得なかった三十一年冷害への慚愧な思いの表明でもあった。

勤勉に働いてもなお抜け出せない農家の貧しさの問題の解決には地主制の打破が不可欠であり、それは戦争、敗戦という代償を払って天皇制国家体制の廃止と農地改革等の一連の戦後改革によって果たされた。貧しい小作農は、自立した自作農として再出発し、日本の農業と農村は大きく変わった。もしこの日まで賢治が生きていたとすれば、彼はきつと「べんぶしてもべんぶしても足りない」と喜んだ

ことだろう。そしてほんとうの農民芸術はこうした社会体制のもとでこそ実現できるのだと実感し、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉の意味も社会的現実性をもって噛みしめられたことだろう。

農業技師としての賢治が直面した諸課題は、歴史の歩みの中でどうなっていたであろうか。打ち続く冷害の苦しい体験を踏まえて、東北稲作の体質も寒さに強いものへと強化され、一九六〇年代頃には岩手でも稲作は安定した農の営みとして定着していった。それは農業近代化という路線の下でのことであり、仔細に見ると、化学肥料の多用と農薬の多用はセットとして進み、堆肥の施用は大幅に減り、食と繋がらない米作りは生産過剰となり、四十年にわたって減反Ⅱ生産調整がつづけられるという状況に陥ってしまった。田んぼの区画は拡大され、戦車のような大型機械が田んぼを走り回るようになり、田んぼの土は踏み固められ、田んぼの土のいのちは衰えてしまった。そのなかで稲は毎年稔ってはいるものの、その稔りを「べんぶしてもべんぶしても足りない」と喜ぶ人はほとんどいなくなってしまう。

しかし、反面では、こうした農のあり方は根本的に間違っているという認識も各所で生まれ始め、有機農業の実

実践は各所で取り組まれるようになっていく。

有機農業の取り組みは賢治が亡くなった一九三〇年代の中頃に篤志家によって開始され、以来七〇年余の歩みを経て今日に至っている。二〇〇六年には国会の全会一致で有機農業推進法が制定され、有機農業は国が奨励する農業のあり方となった。有機農業とは何か、それはどんな取り組みかと問われたときには、私は次のように答えることになっている（中島紀一『有機農業政策と農の再生』コモンズ、二〇一一年）。

農業はもともと自然に依拠して、その恩恵を安定して得ていく、すなわち自然共生の人類史的営みとしてあった。ところが近代農業では、科学技術の名の下に、農業を自然との共生から自然離脱の人工の世界に移行させ、工業的技術とその製品を導入することで生産力を向上させることが目指されてきてしまった。こうした近代農業は、地域の環境を壊し、食べものの安全性を損ね、農業の持続性を危うくしてしまった。こうした時代的状况のなかで有機農業は、近代農業のそうしたあり方を強く批判し、農業と自然との関係を修復し、自然の条件と力を農業に活かし、自然との共生関係回復の線上に生産力展開を目指そうとする営みであった。

こうした視点から有機農業の展開を考えた場合には、その基本方向は農業における「自然共生」の追求であり、具体的には低投入、内部循環の高度化、活性化という技術のあり方が追求され、そうしたことを踏まえて農業と農村地域社会の持続性の確保が目指されることになる。

有機農業の技術論の端的なキーワードは「低投入、内部循環、自然共生」である。有機農業はできるだけ外部資材の投入に依存せず、土の力に依拠し、低投入を原則として生産力の展開を図ることが基本路線であり、それは圃場内外の生態系形成に支えられて実現する。そうした低投入と豊かな生態的環境の中で、作物や家畜の生命力は向上し、発展するという農業技術のあり方が有機農業としてすでに各地で実現されてきている。

このような有機農業の模索と達成は賢治没後のことだが、現在では岩手、花巻も有機農業の盛んな地域となりつつある。賢治はこうした自然と共生した農業の展開を知ることなく亡くなってしまったのだが、もし賢治が生きていれば、こうした有機農業の展開を心から喜んでくれただろう。

未完で終わった賢治の仕事は、没後、その遺志は引き継がれ、新しい時代状況の下でその課題のいくつかは実現

し、開花してきている。

賢治は死に至る床の中で、「グスコープドリの伝記」と「雨ニモマケズ」を書いた。この二つの作品のモチーフは明らかに異なっている。「グスコープドリの伝記」は自己犠牲的な若い技術者が、火山爆発を誘導して窒素肥料を天から降らしたり、冷害を回避したりするという形で、いわば自然を人工的に改変するという線上に農民たちの幸せを実現するというあり方を描いている。それに対して「雨ニモマケズ」では、人の無力さを知ったうえで、天地の動向をそのままに受け入れて、つつましく生きていくという求道的な生き方が示されている。賢治の中で、この二つのあり方は離反し、結局一つの像にはならなかったのだろう。まじめな賢治には、その分裂は苦悩の迷いだったと思われる。しかし、賢治が亡くなった後の時代の展開は、二つのあり方のどちらかというのではなく、自然と人間がよりよく共生していくという第三の道が、農の場においては多様に拓かれていくことを教えているように思われるのである。私はそのことを次の時代を生きた後進の農学徒として賢治先生にぜひお伝えしたいと思っている。

(二〇一一年十月一日)

宮沢賢治の農事詩 (1)

和風は河谷いつばいに吹く

(作品第一〇八三番、一九二七年七月一四日)

ああ

南からまた西南から

和風は河谷いつばいに吹いて

汗にまみれたシャツも乾けば

熱した額やまぶたも冷える

起きあがったいちめんの稲穂を波立て

葉ごとの暗い露を落して

和風は河谷いつばいに吹く

あらゆる辛苦の結果から

七月稲はよく分蘖し

豊かな秋を示してゐたが

この八月のなかばのうちに

十二の赤い朝焼けと

湿度九〇の六日を数へ

莖稈弱く徒長して

穂も出し花もつけながら

つひに昨日のはげしい雨に

次から次と倒れてしまひ

ここには雨のしぶきのなかに

とむらふやうなつめたい霧が

倒れた稲を被つてゐた

その十に一つもなからうと思つた

不良な條件をみんな被つて

豫期したいちばん悪い結果を見せたのち

こんどはもはや

十に一つも起きれまいと思つてゐたものが

わづかの苗のつくり方のちがひや

燐酸のやり方のために

今日はそろつてみな起きてゐる

しかもわたくしは豫期してゐたので

やがての直りを云はうとして

きみの形を求めたけれども

きみはわたくしの姿をさけ

雨はいよいよ降りつゝ

遂にはこも水でいっぱい

晴れさうなけはひもなかったので

わたくしはたうとう氣狂ひのやうに

あの雨のなかへ飛び出し

測候所へも電話をかけ

村から村をたづねてあるき

聲さへ涸れて

凄まじい稲光りのなかを

夜更けて家に歸つて来た

けれどもさうして遂に睡らなかつた

さうしてどうだ

今朝黄金の薔薇東はひらけ

雲ののろしはつぎつぎのぼり

高壓線もごうごう鳴れば

澱んだ霧もはるかに翔けて

たうとう稲は起きた

まったくのいきもの

まったくの精巧な機械

稲がそろつて起きてゐる

雨のあひだまつてゐた穎は

いま小さな白い花をひらめかし

しづかな飴いろの日だまりの上を

赤いとんぼもすうすう飛ぶ

ああわれわれはこどものやうに

踊つても踊つても尚足りない

もうこの次に倒れても

稲は断じてまた起きる

今年のかういふ濕潤さでも
なほもかうだとするならば
もう村ごとの反當に

四石の稲はかならずとれる
森で埋めた地平線から
青くかがやく死火山列から
風はいちめん稲田をわたり
また栗の葉をかがやかし
いまさわやかな蒸散と

透明な汁液の移轉

ああわれわれは曠野のなかに
蘆とも見えるまで逞ましくさやぐ稲田のなかに
素朴なむかしの神々のやうに
べんぶしてもべんぶしても足りない

宮沢賢治の農事詩（2）

それでは計算いたしませう

（作品番号なし、執筆日時不詳）

それでは計算いたしませう
場所湯口の上根子ですな
そここのところの

總反別はどれだけですか

五反八畝と

それは臺帳面ですか

それとも百刈勘定ですか

いつでも乾田ですか濕田ですか

すると川から何段上になりますか

つまりあすこの栗の木のある觀音堂と

同じ並びになりますか

ああさうですか あの下ですか

そしてやつぱり川からは

一段上になるでせう

畦やそこらに

しろつめくさが生えますか

上の方にはないでせう

そんならスカンコは生えますか

マルコや、はどうですか

土はどういふふうですか

くろぼくのある砂がかり

はあさうでせう

けれども砂といったつて

指でかうしてサラサラするほどでもないでせう

掘り返すとき崖下の田と

どっちのほうが楽ですか

上をあるくとはねあげるやうな気がしますか

水を二寸も掛けておいて あとをとめても

半日ぐらゐはもちますか

げんげを播いてよくできますか

槍たて草が生えますか

村の中では上田ですか

はやく茂つてあとですがる気味でせう

そこでこんどは苗代ですな

苗代はうちのそば高臺ですな

一日一ぱい日のあたるところですか

北にはひばの垣ですな

西にも林がありますか

それはまばらなものですか

生糞でどれだけ播きますか

磷酸を使ったことがありますか

苗は大體とつてから

その日のうちに植ゑますか

これで苗代もすみ まづご一服して下さい

そのうち勘定しますから

さてと今年はどういふ稲を植ゑますか

この種子は何年前の原種ですか

肥料はそこで反當いくらかけますか

安全に八分目の収穫を望みますかそれともまたは

三十年に一度のやうな悪天候の来たときは

藁だけとるといふ覚悟で大やまをかけて見ますか